

第3表 幼虫の発育別にみた寄主あたりの寄生数

種 類	採集地	発育程度	調査数	ウンカ1頭あたりの寄生数		
				1頭	2頭	3頭
トビロウンカ	八幡町	老令	102	43	43	8
		中令	34	22	2	0
		双多子	22	0	0	0
	鶴岡市湯田川	老令	146	28	5	1
		中令	170	10	3	0
		若令	191	0	0	0
セジロウンカ	茨黒町手向	老令	47	8	5	0
		中令	95	10	0	0
		若令	48	0	0	0

る。

次にウンカ1頭あたりの本種の寄生数は、第2表、第3表に示したように、種類、翅型、成虫、幼虫および幼虫の発育段階の別なく、1頭寄生の場合が最も多く、3頭寄生は最も少なかった。この傾向は今村(1932)の結果と同様であつて、1頭寄生が全体の68.5%、2頭寄生が26.8%、3頭寄生が4.9%を占めた。

摘 要

山形県庄内地方において、9月にウンカシヘンチュウの寄生

率に関する調査を行なった。

1) 本種のトビロウンカおよびセジロウンカに対する寄生率は、両ウンカの常発地である出羽丘陵地帯では最も高かった。しかし例年ほとんど発生しない平野部では寄生が全然みられなかった。

2) 本種の寄生率はセジロウンカよりもトビロウンカに高く、長翅型よりも短翅型に高く、また概して成虫よりも幼虫に高かった。これは生息部位や移動性の違いによるものと思われた。

3) 本種の寄生は、幼虫の中令以降に認められることから、その寄生は中令期か若令後期の頃ではないかと考えられた。

4) 本種のウンカ1頭あたりの寄生数は、1頭寄生が圧倒的に多く、2頭寄生、3頭寄生と減少した。

引用文献

江崎悌三・橋本士郎(1937)浮塵子に関する研究. 第1報 浮塵子の生態及び天敵. 農速改良資料 127: 127~135.
 今村重元(1932)二化螟虫及びウンカに寄生する糸片虫(2). 応動 4: 176~180.
 小林 尚(1961)ニカメイチュウ防除の殺虫剤散布がウンカ・ヨコバイ類の生息密度に及ぼす影響に関する研究. 病虫害発生予察特別報告 6: 1~126.
 大分農試(1939)浮塵子の天敵に関する調査. 病虫雑 26: 900~903.

テントウムシ科 3種の食性¹

大野正男

東洋大学生物学研究室
(1968年3月19日受領)

1. ワタフキカイガラムシを捕食するアカイロテントウ

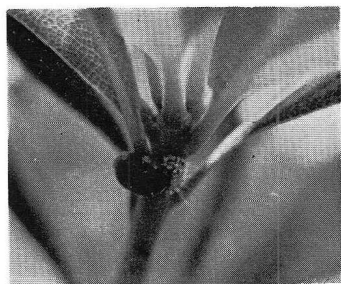
アカイロテントウ *Rodolia concolor* LEWIS は、本州、四国、九州、琉球などの各地に広く分布する テントウムシであるが、その獲物としては、オオワラジカイガラムシ(佐々木, 1904)、クワシロカイガラムシ(Ishii, 1953)の2種が報告されているだけである。筆者は、1967年6月4日、伊豆諸島の式根島にお

いて、本種(成虫)が、トベラに発生したワタフキカイガラムシ *Icerya purchasi* MASKELL を捕食している例を観察することができたので、ここに、簡単に記録しておく。なお、式根島には、ワタフキカイガラムシの発生がみられるのに、その発生量はあまり多くなく、樹木の被害も軽微のように見受けられた。これは、アカイロテントウの他にベダリアテントウ *Rodolia cardinalis* (MULSANT) もよく見かけられたので、これら捕食性天敵による制圧を受けているためのように思われる。

2. ルリハムシ幼虫を食うカメノコテントウ

カメノコテントウ *Aiolocaria mirabilis* MOTSCHULSKY は、北海道、本州、四国、九州、シベリア、支那大陸などに広く分布する大型のテントウムシで、ハムシ、ワタムシ、キジラミ、アブラムシなど、かなり広い範囲にわたる獲物を捕食することが知られている。しかし、最も普通の獲物は、ハムシ亜科

1 Notes on the feeding habits of three coccinellid-beetles. By Masao OHNO (Biology Laboratory, Toyo University, Bunkyo-ku, Tokyo)
 日本応用動物昆虫学会誌(応動昆)第12巻 第2号: 99~100 (1968)



第1図 ワタフキカイガラムシを捕食中のアカイロテントウ。

に属する甲虫，特にクルミハムシの卵，幼虫であるように思われる。筆者は，1959年7月17日，神奈川県丹沢の塔ヶ岳にて，本種の成虫が，ヤマハシノキに発生したルリハムシ *Lineaidea aenea aenea* (LENNÉ) の幼虫を捕食している例を観察した。本種がルリハムシを食うことについては，既に村山(1935)によって報じられているが，このような例は比較的稀であるように思われるので，ここに1例として記録しておく。

3. イタドリハムシ幼虫を捕食するナミテントウ

ナミテントウ *Harmonia axyridis* PALLAS は全国に極く普

通のテントウムシで，その獲物は成虫，幼虫とも，ほとんど常にアブラムシ類である。しかし，稀には他の昆虫を捕食することもあるらしく，筆者は，かつてヤナギハムシを捕食した例を報告したことがある（この時の例は，すべて運動性の乏しい蛹に限られ，幼虫を食う例は観察できなかった）。その後（1962年7月17日），筆者は，佐渡金北山の中腹にて，オオイタドリに大発生したイタドリハムシ *Galerucida bifasciata* MOTSCHULSKY の初令幼虫を捕食中のナミテントウ（成虫）を観察する機会を得たので，ここに簡単に記録しておく。テントウはハムシ幼虫の後背部からくらくらいつき，これを完全にたおすので，その捕食効果はかなり高いように見受けられた。前報（大野，1955）の例とあわせ考えてみると，ナミテントウには，アブラムシの他に，ハムシ類の幼虫や蛹などを食う習性があるといえそうである。

引用文献

- ISHII, T. (1953) Bull. Fac. Agr., Tokyo Univ. Agr. Tech. 1: 1~10.
 村山醸造 (1935) 応動 7: 313.
 大野正男 (1955) あきつ 4: 60~65.
 佐々木忠次郎 (1904) 昆世 8: 487.

ツマグロヨコバイ成虫の脂肪酸構成¹

野 口 浩

農林省農業技術研究所

玉木佳男²・杉本 渥

農林省農業検査所

(1968年3月19日受領)

昆虫の殺虫剤感受性と体脂質含量に関しては多くの報告があり，体脂質含量が高い個体ほど殺虫剤感受性が低いということがしばしば述べられている。しかし，殺虫剤感受性と体脂質含量との間には相関関係が認められないとの報告もあり，現時点では一般的結論を得ることはできない (FAST, 1964)。

筆者らはマラソン感受性の異なるツマグロヨコバイ成虫の2個体群間の脂質含量と脂肪酸構成を調査した結果，脂質含量に

は差異を認めたが脂肪酸構成にはまったく差異が見られなかった。しかし，本種の脂肪酸構成に関する知見はないので以下に簡単に報告する。

供試材料と方法

供試ツマグロヨコバイは神奈川県秦野市産のマラソン感受性および栃木県小山市卒島産のマラソン抵抗性の2個体群で，いずれも農林省農業検査所温室（室温25~30°C）で，イネの幼苗を飼料として飼育増殖して用いた。これら2個体群間のマラソン感受性の差異は第1表のとおりである。

分析試料には成虫を，雌雄の区別なく用いた。全脂質はクロロホルム-メタノール(2:1)によりFOLCHら(1957)の方法にしたがって抽出した。抽出物は石油エーテル(b.p. 30~60°C)溶液とし，これから2.5%のKOHを含む50%含水エタノールで遊離脂肪酸を抽出した。石油エーテル層は濃縮し5%のエタノール性KOHとともに30分還流しケン化したのち得られ

- 1 Fatty acid composition of the green rice leafhopper, *Nephotettix cincticeps* UHLER. By Hiroshi NOGUCHI (National Institute of Agricultural Sciences, Nishigahara, Tokyo), Yoshio TAMAKI and Atsushi SUGIMOTO (Agricultural Chemicals Inspection Station, Kodaira, Tokyo)
- 2 現在，農林省農業技術研究所
日本応用動物昆虫学会誌(応動昆)第12巻 第2号: 100~102 (1968)